

# 論文の内容の要旨

論文題目 『楞伽經』におけるアーラヤ識の研究

氏 名 鄭 有植

『楞伽經』は、漢訳年代他によって五世紀頃の成立と推定される中期大乘經典である。内容的には、唯識思想、空思想、および如来蔵思想などの大乘仏教の代表的な教理を中心として、仏教内外の多くの学派の思想に言及する点にも特色をもつ。同經典の教説に関しては、如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述が見られるのが最も際立った特徴といえる。元来、別の起源をもつ如来蔵とアーラヤ識が『楞伽經』において初めて結合されることになり、その後の『大乘起信論』にも大きな影響を与えている。『楞伽經』はまた、インドにとどまらず、中国の禪宗史にも多大な影響を与えた經典として知られている。

従来、『楞伽經』の識説については、独自の術語使用や、他の関連論書とは異なる内容説明、あるいはまた同經の構成上の特色などから、弥勒・無著・世親に代表される初期唯識学派の教説とは系統を異にするものであるとの見解があった。一方また、『楞伽經』の識説に見られるやや恣意的ともいえる解釈などから、『楞伽經』の識説は、独自の発展を示すというよりは、既存の瑜伽行派の識説を、独特の解釈を付与する形で借用したにすぎないとする理解もあった。このように、いまだ議論が尽きない『楞伽經』の識説を解明するためには、『楞伽經』自体の主要な関連術語を中心に、その用例を同經の文脈に即して精査するとともに、初期瑜伽行派の関連論書における用法との比較考察が不可欠である。

それゆえ本論文では、『楞伽經』のアーラヤ識説に焦点を当て、同經の用例を詳細に検討し、その上で初期唯識文献における関連概念と比較考察し、『楞伽經』におけるアーラ

ヤ識説の特色を明らかにすることを目的とした。以下は、本論文における考察結果の概要である。

[1] まず、「身体・享受(物)・場所」とアーラヤ識の関係については、次のような考察結果が得られた。

1. 「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の3語からなる複合語は、「三界唯心」の文脈において説明されており、その用例を検討した結果、「三界に属するもの」と位置づけられることがまず分かる。そして、複合語を構成するそれぞれの語の意味については、関連する初期唯識文献との比較検討によって、deha は身体 (=六感官)、pratiṣṭhā は器世間をさすことが判明する。ただし bhoga については、初期唯識文献においても解釈に相違があり、五識(六識)として解釈する用例と、五境(六境)として解釈するものがある。前者は享受する識としての用例であり、後者は享受される対象(享受物)をさすという解釈に立つ。『楞伽經』そのものはしかし、いずれの解釈に立つかを明示していない。
2. 次に、アーラヤ識と「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の関係を考証した結果、アーラヤ識は「deha-bhoga-pratiṣṭhā」の三者として顕現するものであることが理解される。また、アーラヤ識と「deha-bhoga-pratiṣṭhā」は、いずれも三性の中の依他起性に関係して説かれることが多いが、この観点から見た『楞伽經』のアーラヤ識に対する捉え方は、他の唯識文献におけるアーラヤ識の理解と大差はないと考えられる。
3. さらにまた、弥勒・無著・世親に帰せられる初期の唯識論書および註釈文献の中には、部分的ながら deha, bhoga, pratiṣṭhā の語が確認される。このことから、『楞伽經』と唯識文献間の関連性が伺えるが、その中でも特に複合語の形が見られる文献、例えば、「pratiṣṭhā-deha-bhoga」を説く世親の『中辺分別論』と、「deha-pratiṣṭhā-bhoga」が述べられている『阿毘達磨雜集論』は、術語使用の点からも、最も『楞伽經』に近い文献であると考えられる。また、『楞伽經』のアーラヤ識と関連する用例の中に「虚妄遍計所執性」(abhūtaparikalpitasvabhāva) という術語が見られる点は、同じ術語を用いる『撰大乘論』との関連性を伺わせる。

[2] 次に、『楞伽經』に特有な如来蔵とアーラヤ識の同一説に関しては、以下のようなポイントが指摘される。

1. 『楞伽經』の中で見られる如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述は、次の3つの類型にまとめられる。

- ・アーラヤ識と呼ばれる如来蔵
- ・如来蔵と呼ばれるアーラヤ識
- ・如来蔵であるアーラヤ識

2. 如来蔵とアーラヤ識を同一視する記述には、「無明住地」(avidyāvāśabhūmi)をはじめ「四住地」のような、『勝鬘經』由来の術語と深く関係していることから、『勝鬘經』との関連性が伺える。
3. また、『楞伽經』に見られる「無明住地」の語には、その原語(vāśa/vāśanā)をめぐる不明な点が残されるが、翻訳年代が古い漢訳やチベット語訳によれば、「無明住地」(avidyāvāśabhūmi)と考えられる。しかし、サンスクリット写本の読みおよび用法の分析からは「無明習気地」(avidyāvāśanābhūmi)の可能性も否定できない。

[3] 最後に、従来の研究で意識に相当するという解釈が一般的であった「分別事識」と、アーラヤ識との関係については、次のような興味深い結論が得られた。

1. 当該の第2章を含め、『楞伽經』は一般に八識説の立場から、「八識」あるいは「八識身」という語により識が八つであることを明示している。
2. その八識の区分法には、他の唯識文献とも共通する「転識とアーラヤ識」という分類法がある。『楞伽經』では、転識を六でなく七転識といい、八識をアーラヤ識とそれ以外の眼識からマナ識までの七転識とに区分している。
3. 『楞伽經』の説明によれば、「分別事識」は、「対象の分別」(viśayavikalpa)と「無始時來の戲論の薰習(潜在印象化)」(anādikālaprapañcavāśanā)とを原因とするものとされる。その中の「対象の分別」とは、意識の機能を意味する。そのような、対象を分別する意識の活動によってアーラヤ識が長養されると説かれることから、「分別事識」はアーラヤ識をさすと考えられる。さらにまた、「無始時來の戲論の薰習」に関連する用例は『顯揚聖教論』にも見られ、『楞伽經』では「分別事識」の原因とされている「無始時來の戲論の薰習」が、『顯揚聖教論』ではアーラヤ識発生の原因とされている。このように、「分別事識」がアーラヤ識を意味していることは、『楞伽經』そのものの記述とともに他の唯識文献によっても裏づけられた。

以上のように、『楞伽經』に説かれるアーラヤ識説は、「分別事識」のようなごく一部の例外をのぞき、既存の初期瑜伽行派における多くの関連術語を採用する。しかしながら、これらの術語を援用する際に、『楞伽經』はかなり特色のある、ときに恣意的とも思われるような解釈を施してもいる。インド大乘仏教の瑜伽行派および中観派の依用經典として尊重され、また中国のとくに禅宗思想史において重んじられてきた『楞伽經』には以上のような特徴があり、そこにまた謎と興味の尽きない同經の魅力の一端をうかがい知ることができる。

本論文では、アーラヤ識説に限定して『楞伽經』の識説を考察した。經典全体の識説を理解するためには他の主要な術語、例えば五法、三性、二無我説等に関する詳細な研究も望まれるのが、これらは今後の課題としたい。